中世・草戸千軒探検㉖　～商う（陶磁器の流通）～

草戸千軒Ⅰ展示室では，今からおよそ650年前の鎌倉時代末から南北朝時代の，草戸千軒の町並みを実物大で復元するとともに，実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し，人々の生活の様子を詳しく紹介しています。

前回は「商う」のコーナーに展示した木簡から，集落での金融活動を紹介しました。今回は同じコーナーから陶磁器の流通を紹介します。

草戸千軒町遺跡からは膨大な量の土器や陶磁器，つまり焼き物が出土しています。こうした焼き物が当時の人々にさかんに利用されていたことはもちろんですが，木製品などとちがって，地中に埋もれても朽ちにくいことも，出土量の多さに影響しています。

常滑焼の擂鉢

出土するさまざまな陶磁器で注目されてきたことは，広範な地域の製品がもたらされていることです。国内の製品では，瀬戸焼・常滑焼（愛知県），東播系須恵器（兵庫県），備前焼・亀山焼（岡山県）などが代表的なものです。また，海外の製品では中国産の青磁・白磁・陶器などが多いですが，朝鮮半島やベトナム産の陶磁器など，東アジア地域一帯の製品がこの集落にはもたらされていました。

中国産の青白磁梅瓶

こうした各地の陶磁器には，実際に使用された痕跡が残るものがほとんどで，集落の人々の日常生活における実用的な器として利用されていたことがうかがえます。つまり，現在の私たちの生活と同様，さまざまな地域の製品が流通しなければ日常生活が成り立たなかったはずです。そして，そうした遠隔地の流通の背景には，それを運搬する交通網や，商人・輸送業者たちの活動，さらには円滑な取引に必要な貨幣など，多様なシステムが存在したにちがいありません。

草戸千軒町遺跡の発掘調査成果が広く知られるようになるまで，鎌倉時代から室町時代にかけての中世という時代は，農業を中心とする自給的な社会で，商業・金融業や輸送業の果たす役割は低いと考えられていました。しかし，遺跡から陶磁器をはじめとする広範な地域の製品が大量に出土したことにより，こうした中世社会のイメージは大きく描き替えられることになったのです。

（主任学芸員　鈴木康之）

ベトナム産の白磁鉢